

## 「自然 (φύσις)」の両義性について

樋笠勝士 (岡山県立大学)

「自然 (φύσις)」は、その内容が何であれ、「自然」として問われ始めたときから、人間との関係において問われてきたと言える。それは、一般的言語習慣として、「自然 (φύσις)」と人間的な営為 (τέχνη, νόμος, θέσις) との対立的な表現があることからもうかがい知ることができる。さらに、その問いの哲学史的始点には「自然を探究」したソクラテス以前の哲学者が居るが、彼らの原因探求について、プラトンは、物理的な事実探求への失望と、人間的な価値探究への切望とを、登場人物ソクラテスに語らせた(『パイドン』)。他方、アリストテレスは、彼らを「自然哲学者・自然を語る者 (φυσιολόγοι)」と呼んで、自然界を物象的科学的に捉える探求者として評価したが、必然性を伴う自然探求は、それを伴わない人間探究(倫理学等)からは学問的に明確に区別されている(『形而上学』)。これらの解釈活動にも、同様の対立的傾向があることがわかる。このようにして、自然は、人間的な営為に対して、対照・対比・対立の視点から捉えられる傾向が強く、それは芸術においても、才能と訓練とによる創作説、芸術における自然の模倣説、技巧を感じさせない自然らしい理想芸術論、自然美と芸術美の優劣論など、多様に論じられてきたことはよく知られている。

さて、自然と人間的営為との対立・対比の視点は、近代の批判哲学が指摘するように、自然を観る人間の問題であると考えてもよいかもしれないが、このような理解の可能性をも含む古代哲学の箴言として、以下のヘラクレイトスの言葉をとりあげたい。

「自然は隠れることを好む (φύσις κρύπτεσθαι φιλεῖ, B123 DK)」。

この断片的な言葉は様々に理解されてきた。例えば、ローマ時代のセネカ(『自然探究』)やマニリウス(『占星術』)は、広大無限な自然を前にした人間が自然を探究することの困難さを語る文脈の中で、このヘラクレイトスの言葉を引用している。そこには、眼前に広がり知ることのできる自然と、隠れていて知ることのできない自然との対比があり、後者には神秘性や神性が見通されている。もちろん、ヘラクレイトスの言葉は、その字義的な意味や、彼の他の言葉との整合性や、思想史的な文脈などを参照して初めて理解すべきものではあるが、断片的な言葉は、言葉を語った者も知られないまま、それ自体で歴史の中を流れていき、二重化して捉える自然思想を持続させてゆく。それは、現象する自然と隠れた真の自然という構図をもった思想である。この構図は、例えば、プロティノス、エリウゲナ、スコラ哲学、ルネサンスと続いてゆき、近代ではスピノザ、ロマン主義思想、そしてハイデガーにまで至る思想史の基軸的な視点となっている。

本発表では、上記の思想史的理解の下で、「ヘラクレイトスへの回帰」の哲学として知られ、自然学でも倫理学でも自然探究を第一にしていたストア派に注目し、ストア派におけるヘラクレイトス解釈、「自然」の二重性の問題、そして自然と芸術の問題を考えたいと思う。